

マルクスの理論を擁護するわけ

こんなことをいうと、非難が雨あられのようにわれわれにあびせかけられるということ、われわれは知っている。君たちは、「教条」にたいする背反やあらゆる独自の意見、等々のために「異端派」を迫害する「正教派」の教団に、社会主義党をかえようとのぞんでいるのだ、と彼らはさげびたてるだろう、われわれは、すべてそういう流行の辛辣な文句を承知している。ただ、それらの文句には、ひとかけらの真理もひとかけらの意味もない。革命的理論がないなら、強固な社会主義党はありえない。革命的理論はすべての社会主義者を統合するものであり、この理論からして社会主義者は、自分の確信のすべてを汲みとり、この理論を自分の闘争方法と活動方式とに応用するのである。自分の理解のおよぶかぎり真理と考えられる理論を、いわれのない攻撃や、この理論を改悪しようとする試みから擁護することは、あらゆる批判の敵となることをまだけっして意味しない。われわれはマルクスの理論を、けっしてなにか完成された、不可侵のものとは考えていない。その反対に、この理論は、社会主義者が生活にたちおくれたくないならばこんごさらにあらゆる方向に前進させなければならない一つの科学のかなめ石をおいたにすぎないと、われわれは、確信している。われわれは、ロシアの社会主義者にとってマルクスの理論を自主的に仕上げるのがとくに必要であると、考える。というのは、この理論は、一般的な指導的諸命題を提供しているだけで、それらの原理は個別的には、イギリスにたいしてはフランスとちがったふうに、フランスにたいしてはドイツとちがったふうに、ドイツにたいしてはロシアとちがったふうに、適用されるからである。だから、われわれは、理論問題をあつかった論文に喜んでわれわれの新聞の紙面を割こうし、すべての同志諸君に、論争点を公然と討議するようすすめるものである。

第四巻 われわれの綱領 P225~226 1899年の後半に執筆

要旨とコメント

革命的理論がないなら、強固な社会主義党はありえない。革命的な理論＝「自分の理解のおよぶかぎり真理と考えられる理論」を守り、擁護し、この理論を自分の闘争方法と活動方式とに応用することはマルクス主義者の初歩的な義務である。われわれは、われわれに対する批判のすべてについて敵対的な態度をいえるわけではない。われわれはマルクスの理論を、けっしてなにか完成された、不可侵のものと考えてはいない。だから、われわれは、理論問題をあつかった論文に喜んでわれわれの新聞の紙面を割くし、すべての同志諸君に、論争点を公然と討議するようすすめるものである。

私たちにほつねに真実に基づかない観念的な「ことばだけの批判」がむけられているが、このような批判は排撃しなければならないが、私たちが前進するためには現実をリアルにとらえ運動を前進させるための活発な論争が不可欠である。